

2023

共通テスト 追試験

国語

解答時間 80 分

配点 200 点

本問題は大学入試センターからの提供・許諾を得て教学社が
再現したものを掲載しています。

本問題の無断複製・転載を禁じます。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

歴史家のキャロル・グラックは、人々が歴史について知りたいと思う理由として、「私たちがいつかは死ぬ運命にある」こと(注1)と、それにもかかわらず「物事の成り行きを知っておきたいという欲望」とを挙げている。歴史学的な関心の出発点となっているのは、まさに「自分の不在」の意識である。

あるいは、私たちがどのようにして歴史を意識するようになるかについて、歴史家のE・ホブズボームは、(注2)「自分より年上の人びとと共に生きる」ことを挙げている。自分がいなかった時間を生きた人々の存在を意識することで、「個人の記憶に直接に残されている出来事より前の時期」としての歴史を意識するようになると。

こうした歴史家たちの態度は、「私たちが歴史の一部でしかない」からこそ、歴史を把握できる、あるいは把握しておきたいという態度である。この場合の「歴史の一部でしかない」とは、「自分はそこにいない」ということである。歴史家たちの意識は「自分の不在」という意識と結びついている。

あるいは、A「自分の不在」を前提とするような歴史理解が歴史学の言説を成立させ、歴史を理解可能にしているのではないだろうか。

私たちが歴史書を読むことで、または学校で歴史教育を受けるなかで慣れ親しんできた言説は、基本的に「非対称性」の言説である。

たとえば、歴史記述は歴史的出来事のほんの一部を語るにすぎないし、歴史に登場する人々は、実際にその歴史を生きた人々のごく一部である。歴史記述と歴史的出来事の間には、そして、登場人物と体験者の間には圧倒的な不均衡がある。

このように、私たちが知りうる歴史は「不均衡」によって成立している。それにもかかわらず私たちが歴史記述にたいして大きな違和感を覚えないのは、歴史そのものが根本的に「非対称性」であるという前提に立っているからであろう。歴史を動かすのは少数者であり、歴史に登場できるのは私たちのほんの一部の人々である。また、おびただしい過去の出来事のなかで、歴史とし

て知る価値があるのはごく一部である。

この「非対称性」は歴史の権力性である。Bしかし同時に、私たちの願望の現れでもある。一人のささやかな市民として、私は自分が歴史に登場しないことを知っている。平穏な生活が続き、自分が歴史に登場しないことも願っている。歴史の出来事に
(イ) ホンロウされないこと、その当事者でないことを願うのである。

だから、私が歴史に関心を抱くのは、自分がなんらかその一部であるにしても、歴史の当事者ではないからである。「自分の不在」は、私たちを歴史から救済してくれる。

そのような関心を、「ゆるい関心」とでも名づけておこう。自分がその一部であり、したがって、まったく無関係ではないが、他方で、当事者そのものでもないような事柄にたいする関心のことである。「ゆるい関心」は知的タイ(ウ)ダではない。急速な環境破壊や制度崩壊のなかで、それでも私たちが生きていけるのは、主として「ゆるい関心」で処理しているからである。私たちが歴史に興味をもち、歴史書を読もうとするのにも、このような「ゆるい関心」が背後にある。

「ゆるい関心」は、みずから歴史をつくり、歴史を変えたいという欲望ではない。むしろ、「歴史的背景」について知りたいと思
い、歴史を理解したいという関心であって、その基本は知的関心である。歴史家は、私たち素人になりかわって、このような知的関心をテツ(エ)テイ的に追究し、歴史を接近可能にし、あるいは理解可能にしてくれる。

私たちは、暗黙のうちに、歴史について語るときは歴史家の研究や仕事を参照しなければならないという約束に従う。今日の歴史研究が個別専門化してしまい、史料調査や史料評価の専門的能力を必要とするからだけではない。私たちの歴史への関心が「ゆるい関心」であって、実践的・政治的な関心ではないからである。自分たちが「歴史の当事者」であるとは思わないし、そうありたいとも思わないから、歴史にたいしては「間接的な関わり方」が基本であると考えからである。

(注3)ヘーゲル以降のドイツ歴史哲学もまた、基本的に歴史にたいする「ゆるい関心」からの思想であった。この歴史哲学は、H・シュネーデルバッハのことばを借りれば、歴史哲学にたいする「深い懐疑」に貫かれている。「哲学的な仕方で歴史に関わること
が、そもそも可能なのかどうか」という懐疑である。

したがって、ヘーゲル以降の歴史哲学は、学問的認識としての「歴史認識の可能性と方法」について思索した。この思索の結実が、ドロイゼンを出発点として、^(注5) デイルタイやジンメルといった哲学者たちが展開した「歴史の解釈学」である。^(注6)^(注7)

たとえば、近代史学の方法論を書いたドロイゼンは、くどいほどに史料研究の重要性を説いているが、その背景には「健全な歴史家意識」ともいうべき姿勢があった。つまり、「記述をする者は、^(注8) シーザーやフリードリヒ大王のように、特に高いところにおいて出来事を中心から見たり聞いたりしたわけではない」という意識である。

歴史家とは歴史を理解しようとする人々であつて、みずからが歴史に登場するわけではない。ドロイゼンは、「歴史とはなにか」について次のような定義を行っている。

歴史ということばでわれわれが考えているのは、時間の経過のなかで起きたことの総体であるが、なんらかのかたちでわれわれの知識がそれに及ぶ限りでのことである。

この定義に従えば、歴史とは、現時点の「知の地平」によって再構成可能な限りでの過去の出来事のことである。歴史については、現在の視点においてしか、ただ断片的にしか知りえない。

歴史について知る人は、歴史の外に立っている人である。過去の出来事を歴史として理解できるのは、当事者たちではなく、観察者たちなのである。歴史家たちの言う「歴史認識の客観性」は、「体験されなかったし、もはや体験もされない」という外の視点から行われる再構成の客観性である。歴史家たちの態度とは、すでに書かれてしまった外国語のテキストを読むような態度なのかもしれない。^(注10) どちらも、著者や原テキストや歴史的出来事からの「解釈学的距離」によって成立している。

私たちは歴史の一部でもあるが、歴史の一部でしかない。私たちは、自分がその一部であるようなものを、そしてその一部でしかないようなものについてどう^(オ) 関わるべきなのだろうか。「歴史との正しい関わり方」とはどのようなものか。

私たちはときに、自分が歴史にたいして「ゆるい関心」しかもたないことに、あるいは、「ゆるい関心」しかもってはいけな

とにたいして、激しい焦燥や憤りの気持ちを抱くことがある。「歴史の捏造」^{ねつぞう}が感じられるときである。そのようなとき、激しい怒りが私たちを襲う。

そうした怒りのなかで、私たちは「ゆるい関心」が「歴史との正しい関わり方」でないことを感じる。私たちがまさに歴史の一部でもあるからである。むしろ「自分の体験」が歴史を正しく理解するための基礎となり、歴史的出来事について客観的に議論するための基盤であつてほしいと切望する。D 私たちは歴史に内在しようとするのだ。おそらくそのようなとき、人は「歴史の証言者」として名乗り出るのであろう。

(北川東子「歴史の必然性について——私たちは歴史の一部である」による)

- (注)
- 1 キャロル・グラック——アメリカの歴史学者(一九四一—)。
 - 2 E・ホブズボーム——イギリスの歴史学者(一九一七—二〇二二)。
 - 3 ヘーゲル——ドイツの哲学者(一七七〇—一八三二)。
 - 4 H・シュネーデルバッハ——ドイツの哲学者(一九三六—)。
 - 5 ドロイゼン——ドイツの歴史学者(一八〇八—一八八四)。
 - 6 デイルタイ——ドイツの哲学者(一八三三—一九一一)。
 - 7 ジンメル——ドイツの哲学者(一八五八—一九一八)。
 - 8 シーザー——古代ローマの将軍・政治家(前一〇〇頃—前四四)。各地の内乱を平定し、独裁官となった。
 - 9 フリードリヒ大王——プロイセン国王フリードリヒ二世(一七二二—一七八六)。プロイセンをヨーロッパの強国にした。
 - 10 原テキスト——歴史記述のもとになる文献のこと。

右記の問題に使用されている著作物は、二〇二三年二月二十八日に著作権法第六七条第一項の裁定を受けて掲載しているものです。

問1 次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) 傍線部(ア)・(オ)と同じ意味を持つものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

・

(ア)

<input type="text" value="1"/>	挙	げ	て
┌──────────┴──────────┐			
④	③	②	①
挙	レ	カ	挙
ド	ッ	イ	シ
ウ	拳	拳	キ

(オ)

<input type="text" value="2"/>	関	わ	る
┌──────────┴──────────┐			
④	③	②	①
ゼ	関	関	ナ
イ	モ	チ	ン
関	ン		関

(ii) 傍線部(イ)と(エ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

③
⑤

(イ)

③
ホ
ン
ロ
ウ

④ ③ ② ①

① ホンカイを遂げる
② 君主へのムホン企てる
③ 説得されてホンイする
④ 資金集めにホンソウする

(ウ)

④
タイ
ダ

④ ③ ② ①

① ダサクと評価される
② ダセイで動く
③ 泣く泣くダキョウする
④ 客がチョウダの列をなす

(エ)

⑤
テ
ッ
テ
イ

④ ③ ② ①

① コンテイからくつがえす
② タンテイに調査を依頼する
③ テイサイを整える
④ 今後の方針をサクテイする

問2

傍線部A「『自分の不在』を前提とするような歴史理解」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

- ① 自分は歴史の一部でしかないという意識を前提として、当事者の立場で体験した出来事だけを歴史と考えること。
- ② 自分の生命は有限であるという意識を前提として、自分が生きた時代の出来事を歴史上に位置づけて把握すること。
- ③ 自分には関与できない出来事があるという意識を前提として、歴史を動かした少数者だけを当事者と見なすこと。
- ④ 自分の生まれる前の出来事は体験できないという意識を前提として、自分より年上の人々の経験から学ぼうとすること。
- ⑤ 自分は歴史の当事者ではないという意識を前提として、個人の記憶を超えた歴史的出来事を捉えようとする。

問3 傍線部B「しかし同時に、私たちの願望の現れでもある。」とあるが、筆者がこのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

① ② ③ ④ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 歴史は、多くの人々が慣れ親しんだ出来事が記述されたものである。こうした捉え方には、歴史の当事者ではないながらもそこに生きた人々の存在を意識したいという、大多数の人々の願いが含まれていると考えられるから。
- ② 歴史は、世界に起きたさまざまな出来事の中で歴史を動かした者の体験が記述されたものである。こうした捉え方には、歴史の当事者としての責任からは免れたいという、大多数の人々の願いが働いていると考えられるから。
- ③ 歴史は、おびただしい出来事の中で権力を持つ者に関する記憶が記述されたものである。こうした捉え方には、歴史に名が残ることのない一人の市民として平穏に暮らしたいという、大多数の人々の願いが表れていると考えられるから。
- ④ 歴史は、ある時代を生きた人々の中で一部の者に関する出来事が記述されたものである。こうした捉え方には、歴史に直接関わらずに無事に過ごしたいという、大多数の人々の願いが反映されていると考えられるから。
- ⑤ 歴史は、時代を大きく動かした人々を中心として記述されたものである。こうした捉え方には、歴史の書物を通して価値ある出来事だけを知りたいという、大多数の人々の願いが込められていると考えられるから。

問4 傍線部C「健全な歴史家意識」ともいうべき姿勢とあるが、それはどのような姿勢か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 出来事を当事者の立場から捉えるのではなく、対象との間に距離を保ちながら、史料に基づいた解釈のみによって歴史を認識しようとする姿勢。
- ② 出来事を自己の体験に基づいて捉えるのではなく、断片的な事実だけを組み合わせ、知りうることの総体を歴史として確定させようとする姿勢。
- ③ 出来事を権力の中枢から捉えるのではなく、歴史哲学への懐疑をたえず意識しながら、市民の代理として歴史を解釈しようとする姿勢。
- ④ 出来事を専門的な知識に基づいて捉えるのではなく、自分も歴史の一部として、実際に生きた人々の体験のみを記述しようとする姿勢。
- ⑤ 出来事を個人の記憶に基づいて捉えるのではなく、現在の視点から整理された史料に基づいて、客観的に記述された歴史だけを観察しようとする姿勢。

問5 傍線部D「私たちは歴史に内在しようとする」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9。

- ① 自分は歴史の一部でもあるとする「ゆるい関心」を抱いていた「私たち」が、「歴史の捏造」を正さなければならないと感じることで、自己の体験を基盤とした客観的な議論が起ることを望むようになること。
- ② 歴史に対して直接的な関わりを避ける「ゆるい関心」を抱いていた「私たち」が、「歴史の捏造」に直面して自らのあり方や状況に憤りを覚えることで、歴史を語るための基礎に自己の体験を据えようとする。
- ③ 観察者として歴史を周辺から眺める「ゆるい関心」を抱いていた「私たち」が、「歴史の捏造」を強く批判する必要性を感じることで、自己の体験を中心に据えつつ客観的に歴史を記述しようとする。
- ④ 実践性や政治性を伴わない歴史への「ゆるい関心」を抱いていた「私たち」が、「歴史の捏造」を生み出す自己の関わり方への怒りを感じることで、歴史的出来事と歴史記述の間の不均衡を解消しようとする。
- ⑤ 歴史の当事者ではないことを基本とした「ゆるい関心」を抱いていた「私たち」が、「歴史の捏造」に由来する焦燥に駆られることで、自己の体験を客観的な歴史に重ね合わせようとする。

問6

授業で本文を読んだKさんは、文章を書く上での技術や工夫について考える課題を与えられ、次のような【文章】を書いた。その後、Kさんは提出前にこの【文章】を推敲^{すいこう}することにした。このことについて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【文章】

本文を読んで、論理的な文章を効果的に書くための技術や工夫について学ぶことができた。そのことについて整理したい。

まず気づいた点は、キーワードを巧みに使用していることである。「自分の不在」や「ゆるい関心」のように、歴史学の専門家ではない読者にも理解しやすい言葉を使い、それにカギ括弧を付けて強調することで、論点を印象づける工夫がなされている。このようにキーワードを使用することで、^a 難しい話題が扱いやすくなる。

次に気づいた点は、キーワードが歴史家の言葉と関連づけて用いられていることである。例えば、冒頭ではキャロル・グラックの発言をふまえて「自分の不在」という言葉が示されている。また、後半では「ゆるい関心」という言葉を説明した上で、ドロイゼンによる歴史の定義が引用されている。^b これらによって説得力のある文章になっている。ただし、歴史家の言葉と筆者の主張は必ずしも一致しているわけではない。

(i) Kさんは、傍線部 a・bをより適切な表現に修正することにした。修正する表現として最も適当なものを、次の各群の

①と④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 10 ・ 11。

a 「難しい話題が扱いやすくなる」 10

- ① 筆者の体験をふまえて議論を開始することが可能になる
- ② 複雑な議論の核心を端的に表現することが可能になる
- ③ 理論的な根拠に基づいて議論を展開することが可能になる
- ④ 多岐にわたる議論の論点を取捨選択することが可能になる

b 「これらによって説得力のある文章になっている。」 11

- ① このように歴史家の言葉を用いることで、キーワードの延長線上にある筆者の主張を権威づけている。
- ② このように歴史家の言葉を用いることで、キーワードの背後にある専門的な知見の蓄積を示している。
- ③ このように歴史家の言葉を用いることで、キーワードの対極にある既存の学説を批判的に検討している。
- ④ このように歴史家の言葉を用いることで、キーワードの基盤にある多様な見解を抽象化している。

(ii) Kさんは、「文章」の末尾にまとめを書き加えることにした。書き加えるまとめの方針として最も適当なものを、次の

① ～ ④のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

① 自己の主張を効果的に論述するためには、従来の学説を正確に提示するとともに、その問題点をわかりやすく説明する必要がある。そのことによつて、主張の位置づけが明確になり、読者も問題意識を持って議論に参加できるようになることを述べる。

② 自己の主張を効果的に論述するためには、専門的な見解を根拠として引用するとともに、論点を絞り筋道立てて展開する必要がある。そのことによつて、主張が明確に方向づけられ、読者も前提となる知識をふまえて議論に参加できるようになることを述べる。

③ 自己の主張を効果的に論述するためには、専門用語を適切に使用して論点を示すとともに、身近な事例を挙げて読者の理解を促す必要がある。そのことによつて、主張の説得力が強まり、読者も具体的に対象を把握した上で議論に参加できるようになることを述べる。

④ 自己の主張を効果的に論述するためには、議論の鍵となる言葉を示すとともに、多様な学説を参照して相互の整合性を確認する必要がある。そのことによつて、主張の客観性が高まり、読者も広い視野を持って議論に参加できるようになることを述べる。

第2問

次の文章は、太宰治「パンドラの匣」(一九四六年発表)の一節である。この小説は、第二次世界大戦の終結直後、結核を患う主人公の「僕」が、療養施設の「塾生」(療養者)たちとの集団生活を、友人「君」に宛てて報告する手紙という設定で書かれている。本文中に登場する「かつぼれ」「固パン」「越後獅子」は、「僕」がいる「桜の間」の同室者たちのあだ名である。これを読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。(配点 50)

きょうは一つ、かつぼれさんの俳句でも御紹介しましょうか。こんどの日曜の慰安放送は、塾生たちの文芸作品の発表会という事になって、和歌、俳句、詩に自信のある人は、あすの晩までに事務所に作品を提出せよとの事で、かつぼれは、僕たちの「桜の間」の選手として、お得意の俳句を提出する事になり、二、三日前から鉛筆を耳にはさみ、ベッドの上に正坐して首をひねり、真剣に句を案じていたが、けさ、やっとまとまったそうので、十句ばかり便箋に書きつらねたのを、同室の僕たちに披露した。まず、固パンに見せたけれども、固パンは苦笑して、

「僕には、わかりません。」と言って、すぐにその紙片を返却した。次に、越後獅子に見せて御批評を乞うた。越後獅子は背中を丸めて、その紙片をねらうようにつくづく見つめ、「けしからぬ。」と言った。

下手だとか何とか言うなら、まだしも、けしからぬという批評はひどいと思った。

かつぼれは、蒼ざめて、

「だめでしょうか。」とお伺いした。

「そちらの先生に聞きなさい。」と言って越後は、ぐいと僕の方を顎でしゃくった。

かつぼれは、僕のところへ便箋を持って来た。僕は不風流だから、俳句の妙味などアてんでわからない。やっぱり固パンのように、すぐに返却しておゆるしを乞うべきところでもあったのだが、A どうも、かつぼれが気の毒で、何とかなぐさめてやりたく、わかりもしない癖に、とにかくその十ばかりの句を拝読した。そんなにまずいものではないように僕には思われた。月

並^{なみ}とでもいうのか、ありふれたような句であるが、それでも、自分で作るとなると、なかなか骨の折れるものなのではあるまいか。

乱れ咲く乙女心の野菊かな、なんてのは少しへんだが、それでも、けしからぬと怒るほどの下手さではないと思った。けれども、最後の一句に突き当^{あた}って、はっとした。越後獅子が憤慨したわけも、よくわかった。

露の世は露の世ながらさりながら

誰やらの句だ。これは、いけないと思った。けれども、それを(イ)あからさまに言^いって、かっぱれに赤恥をかかせるような事もしたくなかった。

「どれもみな、うまいと思いますけど、この、最後の一句は他のと取りかえたら、もっとよくなるんじゃないかな。素人考えですけど。」

「そうですかね。」かっぱれは不服らしく、口をとがらせた。「その句が一ばんいいと私は思っているんですがね。」

B そりゃ、いい筈^{はず}だ。俳句の門外漢の僕でさえ知っているほど有名な句なんだから。

「いい事は、いいに違いないでしょうけど。」

僕は、ちよつと途方に暮れた。

「わかりますかね。」かっぱれは凶に乗って来た。「いまの日本国に対する私のまごころも、この句には織り込まれてあると思うんだが、わからねえかな。」と、少し僕を軽蔑するような口調で言う。

「どんな、まごころなんですか。」と僕も、**C**もはや笑わずに反問した。

「わからねえかな。」と、かっぱれは、君もずいぶんトンマな男だねえ、と言わんばかりに、眉をひそめ、「日本のいまの運命をどう考えます。露の世でしょう？ その露の世は露の世である。さりながら、諸君、光明を求めて進もうじゃないか。(ウ)いたずらに悲観^なする勿^なれ、といったような意味になって来るじゃないか。これがすなわち私の日本に対するまごころというわけのものなんだ。わかりますかね。」

しかし、僕は内心あつけにとられた。この句は、君、一茶が子供に死なれて、露の世とあきらめてはいるが、それでも、悲しくてあきらめ切れぬという気持の句だった筈ではなかったかしら。それを、まあ、ひどいじゃないか。きれいに意味をひっくりかえしている。これが最後の所謂「こんにちの新しい発明」かも知れないが、あまりにひどい。かっぱれのまごころには賛成だが、とにかく古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もてあそぶのは悪い事だし、それにこの句をそのまま、かっぱれの作品として事務所に提出されては、この「桜の間」の名誉にもかかわると思つたので、僕は、勇気を出して、はっきり言ってやった。

「でも、これとよく似た句が昔の人の句にもあるんです。盗んだわけじゃないでしょうけど、誤解されるといけませんから、これは、他のと取りかえたほうがいいと思うんです。」

「似たような句があるんですか。」

かっぱれば眼を丸くして僕を見つめた。その眼は、溜息が出るくらいに美しく澄んでいた。盗んで、自分で気がつかぬ、という奇妙な心理も、俳句の天狗たちには、あり得る事かも知れないと僕は考え直した。実に無邪気な罪人である。まさに思い、邪無しである。

「そいつは、つまらねえ事になった。俳句には、時々こんな事があるんで、こまるのです。何せ、たった十七文字ですからね。似た句が出来るわけですよ。」どうも、かっぱればは、常習犯らしい。「ええと、それではこれを消して、」と耳にはさんであつた鉛筆で、あっさり、露の世の句の上に棒を引き、「かわりに、こんなのはどうでしょう。」と、僕のベッドの枕元の小机で何やら素早くしたためて僕に見せた。

コスモスや影おどるなり乾むしろ(注5)

「けっこうです。」僕は、ほっとして言った。下手でも何でも、盗んだ句でさえなければ今は安心の気持だった。「ついでに、コスモスの、と直したらどうでしょう。」と安心のあまり、よけいの事まで言ってしまった。

「コスモスの影おどるなり乾むしろ、ですかね。なるほど、情景がはつきりして来ますね。偉いねえ。」と言って僕の背中をほ

んと叩いた。「隅に置けねえや。」

僕は赤面した。

「おだてちゃいけません。」落ちつかない気持になった。「コスモスや、のほうがいいのかも知れませんが。僕には俳句の事は、全くわからないんです。ただ、コスモスの、としたほうが、僕たちには、わかり易くていいような気がしたものですから。」

そんなもの、どっちだっていいじゃないか、と **D** 内心の声は叫んでもいた。

けれども、かっぱれば、どうやら僕を尊敬したようである。これからも俳句の相談に乗ってくれと、まんざらお世辞だけでもないらしく真顔で頼んで、そうして意気揚々と、れいの爪先き立ってお尻を軽く振って歩く、あの、音楽的な、ちよんちよん歩きをして自分のベッドに引き上げて行き、僕はそれを見送り、 **E** どうにも、かなわない気持であった。俳句の相談役など、じっさい、文句入りの都々逸以上(注6)に困ると思った。どうにも落ちつかず、閉口の気持で、僕は、

「とんでもない事になりました。」と思わず越後に向って愚痴を言った。さすがの新しい男も(注7)、かっぱれの俳句には、まいったのである。

越後獅子は黙って重く首肯した。

けれども話は、これだけじゃないんだ。さらに驚くべき事実が現出した。

けさの八時の摩擦(注8)の時には、マア坊が(注9)、かっぱれの番に当たっていて、そうして、かっぱれが彼女に小声で言っているのを聞いてびっくりした。

「マア坊の、あの、コスモスの句、な、あれは悪くねえけど、でも、気をつける。コスモスや、てのはまずいぜ。コスモスの、だ。」

おどろいた、あれは、マア坊の句なのだ。

(注)

- 1 慰安放送——施設内でのレクリエーションの一つ。
- 2 一茶——小林一茶(二七六三—一八二七)。江戸時代後期の俳人。
- 3 「こんにちの新しい発明」——本文より前の一節で、「越後獅子」は詩の創作には「こんにちの新しい発明が無ければいけない。」と述べている。
- 4 まさに思い邪無し——本文より前の一節で、「僕」が「君」に対して「詩三百、思い邪無し、とかいう言葉があつたじゃありませんか。」と語りかけていた箇所をふまえた表現。
- 5 乾むしろ——藁わらなどを編んで作った敷物。
- 6 都々逸——江戸時代後期から江戸を中心に広まった俗曲。
- 7 新しい男——「僕」は、戦争が終わり世界が大きく変動する時代の中で、新しい価値観を体現する人物になることを自らに誓っている。
- 8 摩擦の時——施設では一日に数回、毛のブラシで体をこすって鍛えることを日課としている。
- 9 マア坊——施設で働く人物。結核患者たちを介護している女性。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味を表す語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は ～ 。

(ア) てんで

⑤ 格別
④ 全然
③ 依然
② 所詮
① 元来

(イ) あからさまに

⑤ 厳密に
④ 端的に
③ 露骨に
② 平易に
① 故意に

(ウ) いたずらに

⑤ 無益に
④ 当然に
③ 軽々に
② 過剰に
① 絶対に

問2

傍線部A「どうも、かつぱれが気の毒で、何とかなくさめてやりたく」とあるが、このときの「僕」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16

- ① 俳句は得意だと豪語していたもののいざ詠ませると大いに手間取っている「かつぱれ」に不安を抱きつつも、十句そろえたこと自体は評価できるので、不自然でない程度には褒めてあげたいと思っている。
- ② 素人にもかかわらず「先生」と名指しされたことで、俳句が得意だという「かつぱれ」の体面を傷つけていたことに思い至り、自分が解説を加えることで彼の顔を立ててあげたいと思っている。
- ③ 自分たちの代表としてせっかく「かつぱれ」が俳句を詠んでくれたのに、笑われたり相手にされなかったりする様子に同情して、持てる最大限の見識を示して相談に乗ってあげたいと思っている。
- ④ 時間をかけてまとめた俳句をその内容に触れることなく一刀両断にされた「かつぱれ」が哀れに思われて、簡単に切り捨てるようなことはせず、何かしら制作の労をねぎらってあげたいと思っている。
- ⑤ 真剣に俳句に打ち込んだ「かつぱれ」を敬う一方で、彼の作った俳句が軽くないなされたり酷評されたりしている状況に憤りを覚え、巧拙にかかわらずどうかして称賛してあげたいと思っている。

問3

傍線部B「そりゃ、いい筈だ。俳句の門外漢の僕でさえ知っているほど有名な句なんだから」とあるが、ここに見られる表現上の特徴についての説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 傍線部の前後では「かっぱれ」を傷つけないために断定を避けた表現が重ねられているが、傍線部では「かっぱれ」の言うことを当然のこととしながらも「そりゃ」「なんだから」と軽い調子で表現され、表面上の「僕」の配慮と、盗作に無自覚な様子の「かっぱれ」に対するあきれや困惑といった本音との落差が示されている。

② 傍線部の直前にある「素人考えですけど」が「僕」の控えめな態度を表すのに対し、傍線部にある「門外漢の僕でさえ」という表現は「かっぱれ」をおとしめて盗作を非難するものに変化しており、類似した謙遜表現の意味合いを反転させることで、不遜な態度を取る「かっぱれ」への「僕」の怒りが強く示されている。

③ 傍線部の「そりゃ、いい筈だ」が直後の「いいに違いないでしょうけど」と、「門外漢の僕でさえ」が直前の「素人考えですけど」とそれぞれ対応しているように、形を変えつつ同じ意味の表現を繰り返し用いることで、言葉を尽くしてもいっこうに話の通じない「かっぱれ」に対する「僕」のいら立ちが示されている。

④ 傍線部で「そりゃ、いい筈だ」「なんだから」とぞんざいな表現が使われることで、同室者との会話では常に丁寧な口調で語る「僕」の様子が明らかになり、「わからねえかな」と乱暴な口をきく「かっぱれ」の横柄な態度が浮かび上がっており、良識のある「僕」と名句を流用する非常識な「かっぱれ」との対比が示されている。

問4

傍線部C「もはや笑わずに反問した」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

- ① 俳句に対する「かっぱれ」の真摯な態度に触れる中で、「僕」は笑いながら無難にやり過ごそうとしていた自らの慢心を悔いて、よりよい作品へと昇華させるために心を鬼にして添削しようと思気込んだから。
- ② 「かっぱれ」の稚拙な俳句に対して笑いをこらえるのに必死であったが、俳句に対する真剣な思いをとうとうと述べるその姿に触発されて、「僕」も本気で応えなければ失礼に当たると深く反省したから。
- ③ 「僕」に俳句の知識がないと見くびっている「かっぱれ」に対し、提出された俳句が盗作であることに気付いていることを匂わせ、お互いの上下関係を明確にするため決然と異議を唱えておきたいと考えたから。
- ④ 「かっぱれ」の俳句に対して曖昧な批判をしたことで、「僕」には俳句を評する力がないと「かっぱれ」が侮ってきたため、俳句に込めた彼の思いをとことん追及することでその言い分を否定しようとしたから。
- ⑤ 「かっぱれ」の顔を立てて名句の盗用について直接的な指摘を避けるうちに、「かっぱれ」が「僕」を軽んじる態度を取り始めたため、調子を合わせるのを止めて改まって発言の趣旨を聞きただそうとしたから。

問5

傍線部D「内心の声は叫んでもいた」とあるが、本文が「君」に宛てた手紙であることをふまえて、この表現に見られる「僕」の心理の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19。

- ① 「かっぱれ」にうっかり示した修正案を思いもよらず激賞され、その事態にあわてて追加説明をしたものの、本当は「かっぱれ」の俳句に関心がなく、この展開に違和感を抱いていることを「君」に知ってほしいという心理。
- ② 「かっぱれ」に褒められて舞い上がってしまった自分がいたのも確かである一方、「かっぱれ」の俳句などに関わっている状況自体が恥ずべきことだと訴える、内なるもう一人の自分がいたことを「君」にわかってほしいという心理。
- ③ 「かっぱれ」の俳句に対する姿勢に不満を抱きつつも、現実の人間関係の中でははつきりと糾弾できない状況にあったことを示して、微細な修正案を提示することしかできなかった自分の苦悩を「君」に伝えたいという心理。
- ④ 「かっぱれ」には俳句の修正案を示したものの、実際にはそこまで真剣に考えていたわけではないことを強調して、「僕」の修正案に批判的な見解が出されないように「君」に対して予防線を張っておきたいという心理。
- ⑤ 「かっぱれ」には自分は俳句がわからないと説明したものの、内心ではどう修正しても彼の俳句が良くなることはないと感じており、本当は自らの修正案も含めて客観的に価値判断できているのだと「君」に示したいという心理。

問6

傍線部E「どうにも、かなわない気持ちであった」とあるが、「僕」がそのように感じた理由として最も適当なものを、次の

①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20。

- ① 自分を軽蔑しているのか尊敬しているのかよくわからず、俳句に対するこだわりも感じさせないような「かっぱれ」の奔放な態度に接して、いらだちを見せたところで結局無駄であることに思い至ったから。
- ② 句の差し替えを提案されると敵意をむき出しにしたのに、別の句を褒められれば上機嫌になるといような「かっぱれ」の気まぐれな態度に接して、これ以上まじめに応じる必要はないと思い至ったから。
- ③ 「越後獅子」に冷たくあしらわれてもくじけることなく、自分のところにやってきては俳句に関する教えを乞うような「かっぱれ」のけなげな態度に接して、盗作まがいの行為にも悪意はなかったのだと思い至ったから。
- ④ 自分を軽んじたかと思えば盗作に関する指摘を簡単に受け入れ、ついには敬意さえ示して得意げに引き返すような「かっぱれ」の捉えどころのない態度に接して、振り回されてばかりいることに思い至ったから。
- ⑤ 日本の運命についてまじめに語るようでないながら、そこで提示される俳句は盗作でしかないというような「かっぱれ」のちぐはぐな態度に接して、自分はからかわれていたのではないかと思いついたから。

問7

授業で本文を読んだ後、二重傍線部「古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もてあそぶ」をきっかけに、文学作品と読者との関係はどのようなものかを考えることになった。教師からは、外山滋比古『「読み」の整理学』の一節と、本文よりも後の場面の一節とが【資料】として配付された。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

●文学作品と読者との関係を考える——太宰治「パンドラの匣」をきっかけに

I 外山滋比古『「読み」の整理学』より

一般の読者は、作品に対して、いちいち、添削を行うことはしない。しかし、無意識に、添削をしながら読んでいくものである。自分のコンテキストに合わせて読む。それがとりもおさず、目に見えない添削になる。^(注)

多くの読者が、くりかえしくりかえしこういう読み方をしているうちに、作品そのものが、すこしずつ特殊から普遍へと性格を変える。つまり、古典化するのである。

逆から見れば、古典化は作者の意図した意味からの逸脱である。いかなる作品も、作者の考えた通りのものが、そのままで古典になることはできない。だれが改変するのか。読者である。

未知を読もうとして、読者は不可避免的に、自分のコンテキストによって解釈する。

(注) コンテキスト——文脈の意。

II 太宰治「パンドラの匣」 本文より後の「マア坊」の発言から始まる一節

「慰安放送？ あたしの句も一緒に出してよ。ほら、いつか、あなたに教えてあげたでしょう？ 乱れ咲く乙女心の、という句。」

果して然りだ。しかし、かつぱれば、一向に平気で、

「うん。あれは、もう、いれてあるんだ。」

「そう。しっかりとやってね。」

僕は微笑した。

これこそは僕にとつて、所謂「こんにちの新しい発明」であつた。この人たちには、作者の名なんて、どうでもいいんだ。みんなで力を合せて作ったもののような気がしているのだ。そうして、みんなで一日を楽しみ合う事が出来たら、それでいいのだ。芸術と民衆との関係は、元来そんなものだつたのではなからうか。ベートーヴェンに限

(注²)

るの、リストは二流だのと、所謂その道の「通人」たちが口角泡をとばして議論している間に、民衆たちは、その議論を置き去りにして、さつさとめいめいの好むところの曲目に耳を澄まして楽しんでいるのではあるまいか。あの

(注¹)

人たちには、作者なんて、てんで有り難くないんだ。一茶が作つても、かつぱれが作つても、マア坊が作つても、その句が面白くなけりゃ、無関心なのだ。社交上のエチケットだとか、または、趣味の向上だなんて事のために無理に芸術の「勉強」をしやしないのだ。自分の心にふれた作品だけを自分流儀で覚えて置くのだ。それだけなんだ。

(注) 1 ベートーヴェン——ドイツの作曲家(一七七〇—一八二七)。

2 リスト——ハンガリーのピアニストで作曲家(一八一—一八八六)。

(i) 本文の二重傍線部で「僕」によって「古人の句を盗んで勝手な意味をつけて、もてあそぶ」ことだと表現されていた「かっぱれ」の行為は、【資料】のIをふまえることで、どのように捉え直すことができるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

① 江戸時代を生きた人々の心情に思いをはせつつも、自分たちを取り巻く戦後の状況に影響を受けて意図せず句の意味を取り違えている。

② 江戸時代に作られた句に対して、その本来の意味から離れて自分たちが生きる戦後という時代に即したものと読み替えている。

③ 江戸時代と戦後とを対比することで、句に込められた作者の個人的な思いを時代を超えた普遍性を備えたものと昇華させている。

④ 江戸時代の人々と戦後を生きる自分たちの境遇に共通性を見だし、古典化していた句に添削を施すことで現代的な解釈を与えている。

(ii) 【資料】のⅡを読むと、文学作品と読者との関係についての「僕」の考えが、本文の二重傍線部の時点から変化したことがわかる。この変化について、【資料】のⅠを参考に説明したものととして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

22

- ① 「僕」は、文学作品を作者が意図する意味に基づいて読むべきだという考えであったが、その後、読者に共有されることで新しい意味を帯びることもあるという考えを持ち始めている。
- ② 「僕」は、文学作品の意味を決定するのは読者であるという考えであったが、その後、作者の意図に沿って読む厳格な態度は作品の魅力を減退させていくという考えになりつつある。
- ③ 「僕」は、文学作品の価値は作者によって生み出されるという考えであったが、その後、多様性のある価値は読者によって時代とともに付加されていくという考えを持ち始めている。
- ④ 「僕」は、文学作品の価値は時代によって変化していくものだという考えであったが、その後、読者が面白いと感じることによって価値づけられることもあるという考えになりつつある。

第3問

次の文章は『石清水物語』の一節である。男君(本文では「中納言」)は木幡の姫君に恋心を抱くが、異母妹であることを知って苦悩している。一方、男君の父・関白(本文では「殿」)は、院の意向を受け入れ、院の娘・女二の宮(本文では「宮」「女宮」ともいう)と男君との婚儀の準備を進めていた。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に①～⑤の番号を付してある。(配点 50)

1 中納言はかかるにつけても、人知れぬ心の内には、あるまじき思ひのみやむ世なく、苦しくなりゆくを、強ひて思ひ冷ましてのみ月日を送り給ふに、宮の御かたちの名高く聞き置きたれば、同じくは、**A** **もの**の嘆かしさの紛るばかりに見なし聞こえばやとぞ思しける。官位の短きを飽かぬことに思しめされて、権大納言になり給ひぬ。春の中納言も、例の同じくなり給ひて、喜(注2)び申しも劣らずし給へど、及ばぬ枝の一つことに、よろづすさまじくおぼえ給ひけり。

2 神無月十日余りに、女二の宮に参り給ふ。心おごり、言へばさらなり。まづ忍びて三条院へ参り給ふ。**(ア)** **さらぬ**ほどの所にだに、心殊なる用意のみおはする人なるに、ましておろかならむやは。こちたきまで薰(注4)きしめ給ひて、ひき繕ひて出で給ふ直衣姿、なまめかしく、心殊なる用意など、まことに帝の御婿と言はむにかたほならず、宮と聞こゆるとも、おぼろけならむ御かたちにては、並びにくげなる人の御さまなり。忍びたれど、御前などあまたにて出でさせ給ふに、大宮おはせましかば、いかに面立(注5)たしく思し喜ばむと、殿はまづ思ひ出で聞こえ給ふ。

3 院には、待ち取らせ給ふ御心づかひなのめならず。宮の御さまを、**(イ)** **いつしか**ゆかしう思ひ聞こえ給ふに、御殿油、火ほのかにて、御几帳の内におはします火影は、まづけしうはあらじはやと見えて、御髪のかかりたるほど、めでたく見ゆ。まして、近き御けはひの、推し量りつるに違はず、らうたげにおほどかなる御さまを、心落ちるて、思ひの外に近づき寄りたりし道の迷ひにも、よそへぬべき心地する人さまにおはしますにも、まづ思ひ出でられて、**B** **い**かなる方にかと、人の結ばむことさへ思ひつづけらるるぞ、我ながらうたてと思ひ知らるる。

4 明けぬれば、いと疾く出で給ひて、やがて御文奉り給ふ。

「今朝はなほしをれぞまさる女郎花をみなへしいかに置きける露の名残ぞ

(注8) いつも時雨しぐれは」とあり。御返しそそのかし申させ給へば、いとつつましげに、ほのかにて、

「今朝のみやわきて時雨しぐれれむ女郎花霜がれわたる野辺のならひを」

とて、うち置かせ給へるを、包みて出だしつ。御使ひは女の装束、細長など、例のことなり。御手などさへ、なべてならずをかしげに書きなし給へれば、待ち見給ふも、よろづに思ふやうなりと思すべし。

5 かくて三日過ぐして、殿(注9)へ入らせ給ふ儀式、殊なり。寝殿の渡殿わたどのかけて、御しつらひあり。女房二十人、童わらわ四人、下仕へ

など、見どころ多くいみじ。女宮の御さま、のどかに見奉り給ふに、いみじう盛りに調ひて、思ひなしも気高く、らうらうじきものなつかしげに、(ウ) おくれたるところなくうつくしき人のさまにて、御髪は桂つばきの裾すそにひとしくて、影見ゆばかりきらめきかかりたるほどなど、限りなし。人知れず心にかかる木幡の里にも並び給ふべしと見ゆるに、御心落ちるて、いとかひありと思したり。

(注) 1 春の中納言——男君のライバル。女二の宮との結婚を望んでいた。

2 喜び申し——官位を授けられた者が宮中に参上して感謝の意を表すること。

3 及ばぬ枝——女二の宮との結婚に手が届かなかったことを指す。

4 三条院——女二の宮と院の住まい。女二の宮の結婚が決まった後、帝の位を退いた院は、この邸やしきで女二の宮と暮らしている。

5 御前——ここでは、貴人の通行のとき、道の前方にいる人々を追い払う人。

6 大宮——男君の亡き母宮。

7 思ひの外に近づき寄りたりし道の迷ひ——前年の春に出会って以来、男君が恋心を抱き続けている木幡の姫君のことを指す。

8 いつも時雨は——「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひつる折はなかりき」という和歌をふまえる。

9 殿——男君の住む邸宅。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

23

25

(ア) さらにぬほどの所

23

- ① たいして重要でない場所
- ② 立ち去りがたく思う場所
- ③ ことさらに格式張った場所
- ④ あまりよく知らない場所
- ⑤ 絶対に避けられない場所

(イ) いつしかゆかしう

24

- ① いつ見られるかと
- ② こっそり覗のぞこうと
- ③ 早く目にしたいと
- ④ 焦って調べようと
- ⑤ すぐ明白になると

(ウ) おくれたるところなく

25

- ① 未熟なところがなく
- ② 物怖ものおじするところがなく
- ③ 流行から外れることなく
- ④ 時間にいい加減ではなく
- ⑤ 無遠慮なところがなく

問2

傍線部A「ものの嘆かしさの紛るばかりに見なし聞こえばやとぞ思しける」は男君の心情を述べたものだが、その文法と内容に関わる説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

- ① 「ものの」は、接頭語「もの」に格助詞「の」が接続したもので、そのまま女二の宮と結婚しても良いのだろうかという迷いをそれとなく表している。
- ② 「紛るばかりに」は、動詞「紛る」に程度を表す副助詞「ばかり」が接続したもので、木幡の姫君への思いが紛れるくらいにという意味を表している。
- ③ 「見なし聞こえばや」は、複合動詞「見なし聞こゆ」に願望を表す終助詞「ばや」が接続したもので、女二の宮に会ってみたいという願いを表している。
- ④ 「思しける」は、尊敬の動詞「思す」に過去の助動詞「けり」が接続したもので、いつのまにか女二の宮に恋をしていたことに對する気づきを表している。

1 3 段落の登場人物に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

- ① 春の中納言は、男君と同時期に権大納言に昇進したものの、女二の宮の結婚相手を選ぶ際には一步及ばず、男君にあらためて畏敬の念を抱いた。
- ② 春の中納言は、女二の宮と結婚することを諦めきれなかったので、すべての力を注いで女二の宮を奪い取ろうという気持ちで日々を過ごしていた。
- ③ 関白は、女二の宮との結婚に向けて三条院に参上する息子の立派な姿を見て、亡き妻がいたらどんなに誇らしく喜ばしく感じただろうと思った。
- ④ 院は、これから結婚しようとする娘の晴れ姿を見るにつけても、娘が幼かったころの日々が思い出され、あふれる涙を抑えることができなかった。
- ⑤ 院は、女二の宮の結婚相手にふさわしい官位を得るように男君を叱咤しつた激励し、院と女二の宮が住む三条院に男君が訪れた際も、あえて厳しく接した。

問 4

4

5

段落の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

28

- ① 男君は逢瀬わうせの後の寂しさを詠んだ歌を贈ったが、女二の宮は景色だけを詠んだ歌を返して、男君の思いに応えようとしなかった。男君は、本心を包み隠し続ける女二の宮に対して、まだ自分に遠慮しているようだと思った。
- ② 女二の宮のもとを訪れた男君は、翌朝、女二の宮への思いをつづつた手紙を送った。女二の宮からの返歌は、男君の手紙の言葉をふまえたもので、内容・筆跡ともに素晴らしく、理想にかなう女性と結婚できたと男君は満足した。
- ③ 結婚に前向きでなかった男君は、実際に女二の宮に会ってみると、その髪の美しさや容姿の素晴らしさに思いがけず心惹ひかれた。そこで、女二の宮とこのまま結婚生活を続けて、密ひそかに木幡の姫君とも関係を持つと考えた。
- ④ 女二の宮は、身の回りの世話をする女房・童たち、そして豪華な嫁入り道具とともに男君のもとへ嫁いだ。結婚の儀式が盛大に執り行われる中、男君と木幡の姫君の関係を察していた女二の宮は、この結婚の先行きに不安を感じた。

問5 Nさんのクラスでは、授業で本文を読んだ後、本文の表現について理解を深めるために、教師から配られた【学習プリント】をもとに、グループで話し合うことになった。このことについて、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【学習プリント】

傍線部B「いかなる方にかと、人の結ばむことさへ思ひつづけらるるぞ、我ながらうたてと思ひ知らるる」の「人の結ばむこと」は、以下にあげる『伊勢物語』の和歌Iをふまえた表現です。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

I うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ

と聞こえけり。返し、

II 初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな

「ステップ1」 和歌Iの「うら若みねよげに見ゆる若草」には、「引き結んで枕にすれば、いかにも寝心地が良さそうな

若草」という意味がありますが、ほかに別の意味が込められています。それが何かを示して、兄(ここにあげた『伊勢物語』の本文では「男」が妹に何を伝えたかったかを話し合ってみましょう。

「ステップ2」 ステップ1での話し合いをふまえて、傍線部Bに表現された男君の心情について話し合ってみましょう。

(i) Nさんのグループでは「ステップ1」の話し合いを行い、その結果を次のように「フート」にまとめた。空欄

Yに入る内容の組合せとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **29**。

「フート」

・和歌Ⅰは愛らしい妹を見て詠んだ歌なので、「若草」は妹のことを指していると思われる。

・「人」が「若草」を「結ばむこと」には、**X** という意味が重ねられている。



・和歌Ⅱは妹からの返歌で、「などめづらしき言の葉ぞ」には、和歌Ⅰの内容に対する驚きが表れている。

・「うらなくものを思ひけるかな」は、自身が兄の気持ちにこれまで気づいていなかったことを示している。



・和歌Ⅰを通して兄が伝えたかったことは **Y** であると考えられる。

- ④ **X**
— 妹がまだ若いのに結婚してしまうこと
- ③ **X**
— 自分が妹を束縛して結婚させないこと
- ② **X**
— 親が妹の将来の結婚相手を決めること
- ① **X**
— 自分ではなく他人が妹と結婚すること

- Y**
— 妹への恋心
- Y**
— 妹への祝福
- Y**
— 妹への執着
- Y**
— 妹への心配

(ii) Nさんのグループでは、「ステップ2」の話し合いを行い、その結果を教師に提出した。傍線部Bに表現された男君の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

① 自分が女二の宮と結婚したことで、妹である木幡の姫君の結婚に意見を言う立場ではなくなったので、これを機に妹への思いを諦めようとしている。

② 妹と釣り合う相手はいないと思っていたが、女二の宮との結婚後は、兄として木幡の姫君の結婚を願うようになり、自らの心境の変化に呆れている。

③ 女二の宮と結婚しても妹である木幡の姫君への思いを引きずっており、妹の将来の結婚相手のことまで想像してしまっもう自分自身に嫌気がさしている。

④ 娘の結婚相手として自分を認めてくれた院の複雑な親心が理解できるようになり、妹である木幡の姫君が結婚する将来を想像して感慨に耽っている。

第4問

次の〔文章Ⅰ〕は、江戸末期の儒学者安積良斎あさかごんさいが書いたアメリカ合衆国初代大統領ワシントンの伝記「話聖東伝」ワシントンの一節であり、〔文章Ⅱ〕は、宋代の儒学者范祖禹はんそが君主の道について述べた文章の一節である。これらを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

〔文章Ⅰ〕

話わ聖しん東とん為スヤ政ヲ **X**而公、推シテ誠ヲ待ス物。ニ有リ巴は爾みる東とんナル者、明ニシテ敏リ有ニ器(注2)

識(注3)嫻ならヒ辞ニ令ニ通ス大(注4)体。ニ話ニ聖ニ東ニ拳ゲテ之ヲ、参セシム決ニ政ニ事。ヲ在ルコト任ニ八ニ年、法ニ令ニ

整ニ肅、武ニ備ニ森(注6)嚴(注7)闔カフ州シウ大イニ治マル然ニ人ニ或レ有ル議ス其ノ所ニ為ス者、話ニ聖ニ東ニ

感ス憤ス及ヒテ任ニ滿ツルニ乃チ還リ旧キウ閩(注8)深ク自ラ韜(注9)晦クワイシ無シ復タ功ノ名ノ意(ア)以テ壽ヲ終ハル于ニ

家ニ

(安積良斎『洋外紀略』による)

(注) 1 巴爾東——ハミルトン(一七五七—一八〇四)。建国期のアメリカで財務長官を務めた。

2 器識——才能と見識。 3 嫻辭令——文章の執筆に習熟している。

4 大体——政治の要点。 5 在任——大統領の地位にあること。

6 森嚴——重々しいさま。 7 闔州——國中。

8 旧閭——故郷。 9 韜晦——世間の目につかないようにする。

【文章Ⅱ】

人君^ハ以^テ一^ニ人之身^ヲ而御^シ四^(注10)海之^キ広^キ応^ズ二^ニ万務之^ヲ Y。苟^{シクモ}不^{シテ}下^シ以^テ

至^ル誠^ヲ与^{トモニ}賢^ト而役^(イ)シテ其^ノ独^ラ智^ヲ以^テ先^{ダテバ}二^ニ天下^ヲ則^チ耳^ヲ目^ヲ心^ヲ志^ヲ之^ノ所^ヲ及^ブ者、

其^レ能^ク幾^イ何^{バクソ}是^レ故^ニ人君^ハ必^ズ清^{メテ}心^ヲ以^テ涖^{ノゾミ}之^ニ虚^{クシテ}己^ヲ以^テ待^{コト}之^ニ如^ク鑑^{カガミ}之^ヲ

明^{ナルガ}如^{クナ}二^ニ水^ノ之^ヲ止^{マルガ}則^チ物^(注11)至^{ルモ}而^{シテ}不^レ能^ハ罔^{ルコト}矣^(注12)。

(『性理大全』による)

(注) 10 四海——天下。

11 物——外界の事物。

12 罔——心をまどわすこと。

31 X
 ───────────
 ⑤ ④ ③ ② ①
 偏 濫 頑 刻 廉

32 Y
 ───────────
 ⑤ ④ ③ ② ①
 衆 臣 対 美 要

問 1 空欄 X Y
 は 31 . 32 .
 に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号

問2

波線部(ア)「以_レ寿終_ニ于家_ニ」・(イ)「役_ニ其独智_ニ」の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は

33

34

(ア) 「以_レ寿終_ニ于家_ニ」

33

- ① めでたいことに自らの家で事業を成し遂げた
- ② 天寿を全うして自らの家でこの世を去った
- ③ 人々に祝福されて自らの家で余生を過ごした
- ④ 長寿の親のために自らの家で力を尽くした
- ⑤ 民の幸せを願いながら自らの家で節義を貫いた

(イ) 「役_ニ其独智_ニ」

34

- ① 比類のない見識を発揮して
- ② 自己の知識を誇示して
- ③ 孤高の賢人を模倣して
- ④ 自分の知恵だけを用いて
- ⑤ 独特の見解をしりぞけて

問3

傍線部A「然人或_下有議其所為者」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- ① 然人或_下有議_ニ其所_一為_レ者_上
然れども人或いは其の所を議して為す者有れば
- ② 然人或_レ有議_ニ其所_レ為_一者_一
然れども人或いは有りて其の為にする所の者を議すれば
- ③ 然人或_レ有議_ニ其所_レ為_一者_一
然れども人或いは其の為にする所の者を議する有れば
- ④ 然人或_レ有議_ニ其所_レ為_一者_一
然れども人或いは議有りて其の為す所の者なれば
- ⑤ 然人或_下有議_ニ其所_レ為_一者_上
然れども人或いは其の為す所を議する者有れば

問4 傍線部B「耳目心志之所及者、其能幾何」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 君主の見聞や思慮が及ぶ範囲は決して広くない。
- ② 天下の人々の見聞や思慮が及ぶ範囲は君主以上に広い。
- ③ 天下の人々の感覚や思慮が及ぶ範囲は狭くなってしまふ。
- ④ 君主の感覚や思慮が及ぶ対象はとても数え切れない。
- ⑤ 天下の人々の感覚や思慮が及ぶ対象は千差万別である。

問5 傍線部C「如水之止」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 君主のもとに人々の意見が集まることから、まるで水が低い場所に自然とたまっていくようであるということ。
- ② 君主が公平な裁判を常に行っていることから、まるで水の表面が平衡を保っているようであるということ。
- ③ 君主が雑念をしりぞけて落ち着いていることから、まるで波立っていない静かな水のようなものであるということ。
- ④ 君主のこれまで積んできた善行の量が多いことから、まるで豊富に蓄えられた水のようなものであるということ。
- ⑤ 君主が無欲になって人々のおごりを戒めることから、まるであふれそうな水をせき止めるようであるということ。

問6 次に示すのは、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだ後に、教師と二人の生徒が交わした会話の様子である。これを読んで、後の

(i)・(ii)の問いに答えよ。

教師

【文章Ⅰ】の安積良齋「話聖東伝」は、森鷗外もりおうがいの作品「渋江抽齋しぶえちゆうさい」においても言及されています。渋江抽齋は、江戸末期の医者であり漢学者でもあった人物です。抽齋はもとは西洋に批判的だったのですが、「話聖東伝」を読んでは、えを改め、西洋の言語を自分の子に学ばせようと遺言しました。鷗外によれば、「話聖東伝」の中でも抽齋がとりわけ気に入ったのは、次の【資料】の一節だったようです。

【資料】(送り仮名を省いた)

嗚呼、話聖東、雖^レ生^ニ於^レ戎羯^{じゆうけつ}、其^レ為^レ人有^ニ足^レ多^レ者。

教師

「戎羯」は異民族といった意味です。この【資料】で良齋はどのようなことを言っていますか。

生徒A

a。ワシントンに対する【資料】のような見方が、抽齋の考えを変えたのでしょうか。

生徒B

なぜ、【資料】のようにワシントンは評価されているのでしょうか。

教師 「文章Ⅱ」の『性理大全』の一節は、儒学の伝統的な君主像を示しています。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】には似ているところがありますね。

生徒 A

b

生徒 B

c

。「話聖東伝」を通じて、拙齋は立派な為政者が西洋にいたことを知り、感動したのですね。

教師

このように漢文の教養は、西洋文化を受容する際の土台になったわけですね。面白いと思いませんか。

(i) 空欄

a

に入る発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

38

。

- ① 「異民族の出身ではあるけれども」とあるように、良齋は西洋の人々に対する偏見から完全に脱却していたわけではないものの、ワシントンの人柄には称賛に値する点があると言っています
- ② 「異民族の生まれだと言うものもいるが」とあるように、良齋はワシントンの出自をあげつらう人々を念頭に置いて、そのような人々よりもワシントンの方が立派な人物であると言っています
- ③ 「異民族に生まれていながらも」とあるように、良齋はワシントンが西洋人であることを否定的に見る一方で、ワシントンの政策には肯定的に評価すべき面があると言っています
- ④ 「異民族の出自であることを問わずに」とあるように、良齋は欧米と東アジアの人々を対等であると認識し、ワシントンの人生はあらゆる人々にとって学ぶべきものであると言っています
- ⑤ 「異民族の出身でなかったとしても」とあるように、良齋は欧米と東アジアを区別しない観点に立ち、ワシントンの統治の方法にはどのような国でも賛同する人が多いであろうと言っています

(ii) 空欄

b

 ・

c

 に入る発言の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は

39

。

- ① b — 【文章Ⅰ】は、ワシントンが人々から反発されても動じなかったことを述べていますね
c — それは、【文章Ⅱ】のどのような出来事にも信念を曲げない儒学の伝統的な君主像に重なります
- ② b — 【文章Ⅰ】は、ワシントンが法律を整備して国を安定させたことを述べていますね
c — それは、【文章Ⅱ】の個人の力より制度を重視する儒学の伝統的な君主像に重なります
- ③ b — 【文章Ⅰ】は、ワシントンが信頼する部下に自分の地位を譲ったことを述べていますね
c — それは、【文章Ⅱ】の権力や名誉に執着しない儒学の伝統的な君主像に重なります
- ④ b — 【文章Ⅰ】は、ワシントンが政策の意図を率直に文章で示したことを述べていますね
c — それは、【文章Ⅱ】の人々に対して誠実に向き合う儒学の伝統的な君主像に重なります
- ⑤ b — 【文章Ⅰ】は、ワシントンが優れた人材を登用し、政務に参加させたことを述べていますね
c — それは、【文章Ⅱ】の公正な心で賢人と協力する儒学の伝統的な君主像に重なります